

渡部修市長が語る

若い感性で『8月6日。広島』を体験して欲しい…

広島平和記念式典 中学生派遣事業

平成21年4月に『核兵器廃絶 平和都市宣言』をした磐田市は、本年度初めての取り組みとして『広島平和記念式典中学生派遣事業』をスタートした。

この事業は、市内の各中学校から代表1人が、8月5日・6日の2日間、被爆地『広島』を訪れ、原爆ドーム、広島平和記念資料館の見学や『平和記念式典』に参列する。この事業には、若い感性を持つ中学生に何かを思い、何かを感じ取って欲しいという熱い思いが込められている。

今回、特集として、この事業への熱い思い、そして、中学生とともに過ごした2日間を振り返る。

なぜ、この事業を？

私自身も戦争を知りませんので、今生きる若者たちと一緒にです。生まれた年代が違いますので、私には身近な大人の方たちから戦争の話をよく聞く機会がありました。しかし、今の若者たちには、戦争の話を直接聞くという機会がなく、平和への思いが年々薄れているように感じていました。今ある平和や生活は、当たり前にある訳ではありません。多くの人たちの努力や苦労の上に成り立っています。戦争のあった時代に生きた人たちは、戦争の話を伝えることはもちろんですが、さまざまな過去の苦労があつてこそある『今の平和を大切にしたい』という思いが強いと思います。この思いを若い感性を持った中学生たちが広島で受け止め、何かを感じ取って欲しい、そのような強い思いで始めた事業です。

広島を訪問しての感想は？

初日、広島平和記念資料館に入り、生徒たちの顔付きが変わっていくのを感じました。その表情を見て私は「この事業をやって良かった」と思いました。

8月6日の広島平和記念式典には、生徒たちと一緒に正式に参列し、さらにその思いを強くしました。

私は、市役所の中で市長という指導者の立場にあります。その業務を推し進める中で、最も忘れてならないことは、『人材の育成』だと思っています。これからの時代を背負っていく中学生たちに、こうした体験を設定したのもその思いからです。

真剣な表情で被爆地・広島であった過去の現実を一生懸命に受け止め、何かを感じ取ろうとしている彼らの姿を見て、私は強く感動を覚えました。

彼らから感じたことは？

時代が違い社会環境が変わっているだけで、若者の本質的なものは、昔も今も変わらないと感じました。

だからこそ、若者の真の素材を生かすためには、社会構造や大人自身、学校現場など、彼らを取り巻く環境が変わらなければいけないと思います。

私たちには、次の時代を担う人たちを育て、任せていくという責務があります。

ふと振り返ってみると、私たちが、厳しい時代に耐えられるような若者を育てる努力を本気でしてきたかどうか、私自身反省を覚える一人ですが、この事業が一つのきっかけとして、今を生きる彼らの心に響いてくれればうれしいと思っています。



彼らに期待することは？

将来、良き指導者になってもらえたらうれしいです。学校の先生になるもよし、会社に勤めるもよし。社会の中で良きリーダー的存在になって欲しいです。組織では、必ず上司、部下の關係が出てきます。私はいつも「しっかかりした立派な上司の下で働く部下は、それだけで幸せだ」と言っています。昇格が早いとか遅いとかではなく、しっかかりと人間形成がされた人の下で働くことは、その人自身が多くを学び取り大きく成長できると私は思います。充実した人生を送るためには、自分自身の気持ちが勝負です。

彼らに伝えたいことは？

近年、テストの点数や勉強だけに少し偏り過ぎたような歴史がありますが、それ以前に、家族や周りの人への感謝の気持ち、物事の大切さなどをしっかりと感じ取り、社会の一員としてたくましく生きて欲しいです。今ある当たり前なのは、簡単に手に入るものではありません。一生懸命に努力した結果、手に入ります。家庭も同じです。家族が協力し合って努力しているからこそ、温かい家庭があります。努力しないで温かな家庭は築けないはずです。このようなことを一つでも自分自身で感じ取ってもらえればと思います。

最も印象に残ったことは？

夕食をみんなできとついているとき、宿泊先の方が磐田の中学生たちを素晴らしいと誉めてくれました。私は、さすが各学校の代表者だと誇らしく思いました。『磐田市戦没者・戦災死者追悼式』では、参加した9人の中学生を代表して磐田第一中の渥美さんが広島での体験と平和への思いを発表してくれました。それは、会場にいた遺族の皆さんを含め、会場にいる方、全員に大きな感動を与えました。人の気持ちを動かすことは理屈ではないのです。教科書で学べないものは、この世の中にはたくさんあるのではないかと思います。

今後の事業展開は？

行政が行う事業は基本的に、スタートしてから5年または10年の間隔で検証し、見直すことが必要だと思います。しかし、『平和』というものは、一般的な事業とは異なり、普遍的なものです。私が市長であり続ける限り、毎年継続していこうと思っています。できれば、生徒たちの表情や心の動きなどを教育現場にいる先生があの光景を見るべきではないと感じました。彼らの姿を大人が見て、大人が自然発生的に教育されてしまうようになったら磐田の未来は明るいでしょう。

特集

8月6日。広島

この地で、
中学生たちは
何を感じ取ったのか…

太平洋戦争が末期を迎えた1945年（昭和20年）8月6日午前8時15分、人類史上最初の原子爆弾が、広島市に投下された。街は一瞬のうちに壊滅し、子どもから老人まで多くの尊い命が奪われた。

被爆当時、広島には約35万人の市民や軍人がいたと考えられており、原爆によって死亡した人数は、現在も正確にはつかめていないが、放射線による急性障害がおさまったとされる1945年（昭和20年）12月末までに、約14万人が死亡したと推計されている。

ことし、65回目の原爆の日を迎えた広島。今を生きるわたしたちには、この悲惨な事実を決して過去の出来事として片付けることなく、未来の世代に伝えていくことが必要だ。

本年度スタートした「広島平和記念式典中学生派遣事業」。今を生きる中学生たちは、テレビや教科書を通してではなく実際に触れる広島で何を感じ取るのだろうか。

そして、未来へどのように伝えてくれるのだろうか。

第1章 出発



広島平和記念式典派遣団 結団式

出発を1週間後に控えた7月29日。結団式と事前学習会が開催された。渡部市長は「苦しい時代を乗り越え、今の平和な世の中があります。この事業に参加して何かを感じてください」とあいさつ。真剣な表情の生徒たちは、どのように『広島』を受け止めるのだろう。



まつしたよしあき 松下佳史さん (南部中)
いらいあきら 井伊旦さん (豊田南中)
ひだゆき 飛田侑哉さん (竜洋中)
なかやま まさみ 中安正己さん (向陽中)

8月5日、広島へ出発
いよいよ広島へ向けて市内中学校の各代表9人が出発。ほとんどの生徒が初めて訪れる広島。
生徒たちは「行ってみたいと分らない」「事前学習会で学んだ原爆ドームを早く見てみたい」「事前学習会では正直怖かったけど、この現実を受け止めなくてはいけない」など、行きの新幹線の中で、さまざまな思いや考えを語った。
すぐに意気投合した生徒たち。和やかな雰囲気、広島を目指す。
※神明中学校は急病により不参加



あつみあやな 渥美文也奈さん (磐田第一中)
いけたまこ 池田真子さん (城山中)
かみくさこ 川倉彩子さん (豊岡中)



たまけりあき 玉井里於さん (豊田中)
うのとも恵さん 鵜野朋恵さん (福田中)

広島で...

8月5日、磐田市の中学生たちが広島に到着。
2日間という限られた時間の中で、
彼らはこの夏、貴重な体験をした。



「像」を見学

被爆した三輪車を見て思わず^{きょうがく}驚愕

被爆者の方から直接話を聞く

原爆の恐怖を痛感

8月5日は、『広島平和記念資料館』と『原爆ドーム』を見学。平和記念式典前日ということもあり、館内は大勢の来館者でにぎわう中、彼らは積極的に館内を散策した。南部中・松下さんは「原爆の恐ろしさを痛感しました。今でも決して消えない広島の方々の心の痛み、悲しみ、恐怖、憎しみを感じました。自分もこれから、原爆のことに関心を持って生活していきたいです」と率直な感想を語る。被爆者のボランティアの方から当時の話を直接聞いた豊岡中・川倉さんは「原爆による被害はとて大きく、当時栄えていた広島を瞬間にして消してしまいました。原爆は恐ろしいものだ、あらためて感じました」と原爆の恐怖を再認識した。

わずか一発の原爆が引き起こしたこの悲惨な出来事。なぜ広島に原爆が投下されたのか。投下目標は、原爆の効果を正確に測定できるように直径約4・8 km以上の市街地を持つ都市から選ばれた。最終的な目標都市の広島、小倉、新潟、長崎の中で広島が第一目標に選ばれたのは、連合国軍の捕虜収容所がないと思われていたためだ。原爆投下は目視。昭和20年8月6日、広島の天気は晴れ。広島

の運命は決まった。

第2章 体験



猛暑の中、真剣な表情で式典に参列



潘基文国連事務総長のあいさつ



思いのこもった「平和への誓い」



「原爆の子の

平和への思いを痛感

広島は平成22年8月6日、65回目の原爆の日を迎えた。74カ国もの参加があり、核廃絶の機運が世界的に盛り上がる中、潘基文国連事務総長やジョン・ルースマ駐日大使が初めて参列し、世界の注目を集めたことしの『広島平和記念式典』。

猛暑の中、彼らは真剣な表情で、この歴史的な式典に参列した。そのときの感想を向陽中・中安さんは「地元小学生による『平和の誓い』では、気持ちが伝わってきました。聞いていて身震いがありました」と感想を語る。竜洋中・飛田さんは「広島の人たちが、どれだけ平和を愛しているのかが分かりました。式典中、早く平和になって欲しい、安心したい、二度と起こらないで欲しいという願いが、とても伝わりました」とそれぞれが平和への思いをあらためて強く感じ取った。

式典には、約5万5000人が参列し、投下時刻の午前8時15分に黙とうを捧げた。核兵器がなくなる日まで燃え続ける『平和の灯』の前で、潘事務総長は「ともに広島炎を消そう。その炎を希望の光へ変えよう」と被爆者が生きている間に核廃絶を実現できるように呼び掛けた。この言葉は広島市民そして、彼らの心に深く刻まれた。

広島の声

広島市安田女子高校に咲く

被爆樹木 桜



宮前門付近に咲く被爆樹木「桜」

平和記念式典の会場で、会場案内のボランティアに参加していた広島市在住の大河原麻由さん（高校3年生・写真右）と浅岡紗江さん（大学3年生・写真左）の二人に話を聞いた。

大河原さんが通う安田女子高校（浅岡さんも同校出身）には、一本の桜の木があり、毎年春に美しい花を咲かせている。この桜の木は、65年前に実際に被爆した木で、被爆樹木として認定されている貴重な桜だ。同校の生徒会は2年ほど前、被爆しても生き続けるこのたくましい桜に命の輝きを見つけ、被爆地である広島から、わたしたちの思いを日本中の学校に届けたいと思い立った。『接ぎ木』という技術を使って苗木を作り、現在、全国25カ所に苗木を送り、この桜を通じた全国の輪が徐々に広がっている。二人がボランティアとして式典に参加したのは今回が初めてだが、例年とは明らかに違う雰囲気を感じているという。



大河原さんは「広島の若者として、『原爆の悲惨さを知ってもらい平和の尊さを考えて欲しい』という思いを次世代に伝えていく大切な役割を担っていると強く感じています。8月6日は広島の人々には感慨深い日です。来年、大学生になって県外に出たとき、その地の人々と『8月6日への思い』のギャップがあるだろうと不安を感じます。自分たちが伝えて理解してもらうことが『わたしたちの使命だ』と言うと、強いかもしれません、そのぐらいの気持ちで望んでいかなくてはいけないと、ことはあらためて感じました」と話す。浅岡さんは「戦争という誰もが幸せになれない悲惨な出来事を二度と繰り返さないために、まずは自分が戦争・原爆についてよく学び、そして多くの人たちに積極的に伝えていけたらと思っています」と熱く語った。

広島を受け止めて…

戦争を知らない今を生きる彼らの心は、この2日間でのようにならなくなったのだろうか。そして『戦争』・『平和』への思いは…

平和記念式典の参列を終えた生徒たちは、貴重な体験を胸に秘め、ふるさと磐田の地へ。この2日間の体験は『戦争は過去のこと』、『戦争なんて起こるわけがない』、『教科書でしか知らない』という彼らの当初の思いを大きく変えた。それはまるで、世界平和を願う広島の人たちの熱い思いが乗り移ったかのように感じる。

豊田南中・井伊さんは「今の日本では戦争がないので、ぼくは関係ないものと思っていました。しかし、広島平和記念資料館を見学したとき、ぼくは戦争について無知だということが分かりました。戦争の終わった日本に生きるぼくたちが今できることは、平和の大切さを世界に広めることだと思えます」と語ると、福田中・鶴野さんは「戦争は、もう過去のことだから、今は関係ないと思っていました。しかし、広島に行ったら核兵器で亡くなってしまった人のことや、まだ、被爆者の方が生きていて、忘れてはいけ

ない過去だと思いました。平和のためにも、戦争があったことは忘れないようにしようと思えました」と話す。これらの話から、彼らの大きな心境の変化が手に取るように伝わる。この体験は『戦争』そして『平和』に対する彼らの意識を大きく変えたようである。そして、直接広島に空気に触れたことにより、身近な出来事であったことを確信した。さらに豊田中・玉井さんも「以前は、戦争といっても自分の身近に感じていなかったし、今の自分の暮らしが平和だと思っていました。広島に行き、戦争はどんな人からでも未来を奪い、もし、その時代に自分が生まれていたら死んでいたのかも考えるようになりまし。核を持っている国が存在する限り、平和になったとは言いがたいと思いました。広島の人々が持っている思いが実現されて初めて完全な平和になるのかなと思えました」と話した。この2日間で彼らなりに『広島』を受け止めたのだ。



その表情には、たくましさを感じた。池田さんは、8月13日放送のSBSラジオ「iぼーと発！磐田情報局」に出演し、県下全域にこの体験を発信した。

ラジオ番組で県下へ発信

各学校の代表としての重責を見事に果たした中学生たち。この体験で学んだこと、感じ取ったことを彼らは誰に語り、どのように伝えていくのだろうか。

受け止めた思いを磐田へ

追悼式で思いを伝える

磐田第一中の渥美さんは、8月15日に市民文化会館で行われた『磐田市戦没者・戦災死者追悼式』で中学生派遣団9人を代表し、広島での体験と平和への思いを発表した。

『わたしは、広島平和記念式典派遣団の中学生の一員として、8月5日と6日の2日間、広島を訪れました。1日目は平和記念資料館で当時の様子や原爆による被害について学びました。今までは想像の中や授業の一環で習ったことではなかった原爆が一瞬の内にして人々の生活を壊し、広島をあんなにも真っ黒に染めてしまったことを知って、心の奥が締め付けられたように感じました。原爆が引き起こした多くの被害の資料を実際に自分自身の目で見ることで、当時の悲劇と向き合うことができました。少し前までは戦争について「戦争はあってはいけない」という当たり前の考えしか持っていませんでした。しかし、2日間の体験をしていく中で戦争によって、どのような被害が起こるのか、そして、どんなにたくさんの尊い命が失われるのかを世界



の一人一人に考えてみて欲しいと思うようになりました。また、日々の自分の悩み事がどんなに小さなことを、こうして平和に暮らせていることがどんなに幸せなことなのかを気付かせてくれました。65年がたった今でもなお、昨日のことのように思い出されるという戦争。ここ磐田市でも、たくさんの方が、その戦争の被害に遭われ、尊い命を奪われました。その悲しさ・無念さ、そして戦争に対する怒り・おろかさを私たちの世代が受け継ぎ、平和な未来を築いていかなければいけないと思いました』(二部抜粋) この内容には、今回参加した中学生たちの思いが凝縮されており、会場内の約450人の参列者を感動の輪に包み込んだ。わたしは信じる。きっと彼らであれば、この思いを未来へ伝えてくれると。

広島に学ぶ

本年度、初めての取り組みとして行われた『広島平和記念式典中学生派遣事業』。各中学校を代表して集まった中学生9人は、この夏、教科書では学べない貴重な体験をした。それは、普段当たり前にある『平和の大切さ』と『過去、ここ日本で戦争があったという事実』を自らの目で確かめ、自らの耳で聴き取ったことにある。この体験は今後の彼らの人生の大きな財産となり、そして、この熱い思いは未来の世代へ語り継がれるだろう。この事業は、来年度も継続予定。市内の多くの中学生にこの広島を体験してほしい。

